

試験答案の出来はさまざまだったが、概して良く書けているという印象を受けた。政治学の理論をクラブ活動運営の問題に適用し、分析したユニークな学生もいた。そ

ういう答案に出会うと、自分の講義も全くムダではなかったのかなと、少しホッとする。

算数と数学

長谷川 順 一

小学校の算数は易しかったが、算数が数学と名前が変わり、中学、高校と進むにつれて段々難しくなってきた、だから大学の数学が一番難しいだろう——そんな考えをもっている学生もたくさんいるだろう。勿論、大学の数学は易しいなどと言うつもりは、私にはない。しかし大学の数学が難しいなら、それと同様に算数もやはり難しい、と思うのだ。それは“そう言えば、つるかめ算などの文章題はよく分からなかった、難しかった”といったことでは決してない。大学の数学の難しさが（こう言い切ることには異論もあろうが）その論理の明晰さにあるとするなら、算数の難しさは、そこで扱われている概念のある種のあいまいさにある。一言で言うなら、算数には余りにも分からないことが多いのである。

ところで、算数、数学の授業をしていて小学生や中学生、高校生から出る質問の一つに、“算数や数学を勉強して一体何になるの”というのがある（この“一体何になるの”という質問の前あるいは後には、必ずといっていい程、“数学（算数）がさっぱり分からない”という恨み言がついているのだが……）。“何になると思う？”と逆に聞

き返すと、“論理力がつく、思考力がつく”といった紋切り型の答えが返ってくる。しかし、論理力や思考力は別に数学の“専売特許”ではないだろう。有名な作家の中に“僕は学生の頃、数学がさっぱり分からなくて……”と述べている人がいる。だからと言ってその人に論理力がない、とは言えない。算数、数学を学習すると論理力や思考力が本当につくのかどうかは私にはよく分からないが（例えば、内容を離れた思考力なるものが存在するのか、といった——）；しかし、少なくとも一つは算数、数学の学習に期待できるものがあると思う。

それは、算数や数学が、我々が“世界”を見る際の一つの枠を提供してくれるのではないか、ということである。たとえば“いち”に“さん”に相当する言葉はあるが、それ以上はすべて“たくさん”ですませる、すなわち“し”“ご”“ろく”……に相当する言葉を持たない人達が地球のどこかにいるそうである。そのような人達と我々とは、そのもつ世界はかなり異なったものであることは、容易に想像がつく（ただし、どちらが“よりよい”のかは分からない）。とすれば、算数や数学の学習は、我々の側

から見れば文化あるいは世界の伝達としての教育の問題となろうし、子どもの側から見れば、外的世界、事物との相互交渉を通じて自らの内に世界（特に数学）を構築してゆく過程とも見られることになる。しかし、我々がいくら伝達しようとしても、子どもが数学を主体的に構築してくれなければ、その伝達は成功しないだろう。

ここに、最初に述べた算数の難しさが立ち現れてくる。すなわち、どのようにして数は“発生”するのか、分数の意味は一体何か、倍と比と比例はどのような関係にあるのか、直線とは何か、面積とは何か……etc……。つまり、数学的概念の発生にまわりつくあいまいさが、算数をよく分からない、難しいものになっているのである。そ

れを整理し直し、体系づけたものが“数学”ということになるのだろう。最初に、大学の数学の難しさがその論理の明晰さにある、と述べたが、それは、交通整理をしたが故の明晰さであり、やはり交通整理をする前の“影”をひきずっているはずである（想像力が創造力につながることは、多くの数学者の指摘するところでもある）。

私は現在授業を担当していない。それで一般数学として、明晰な昼間の数学をとり上げるか、それとも夜明けあたりから始めるか——今だに決めかねている。また、数学に“怨念”をもつ学生もいよう。昼間と影と怨念と——三題断ではないが、そのあたりに実は数学の楽しさがあるようにも思うのだが——。

講道館柔道，タイを往く——その4

村 田 直 樹

前号迄のあらすじ——。

東南アジアの巨大国際都市バンコク。その中央を動脈の如く走るスクンヴィット通りソイ47の高級アパートに旅装を解き、噂に聞く“アヤさん”を雇うことになる。

「随分広い部屋だなァ。寝室が2つも在って。さて、噂に聞くアヤさんだけど、どうやって雇うのかなァ。できれば若いピチピチギャルで、住み込みがいいぜ、ウッヒッヒッ。」

と、期待に胸ふくらませてうきうきする

も束の間、訳の分からぬうちに全く期待外れのアヤさんを雇う破目になった私。

そんな或る日、アパートの敷地内で二人のタイ女性に遭遇。一人はまさに明眸皓齒。一人はその肌浅黒き、まさに食べ頃お色気権化。聞けば共に此処で働くアヤさんというではないか——。

ブーン、キーン。車の停まる音。
“コブクンカップ、サワッディカップ!”
“サワッディカップ、アチャー。”

最初の方は私で、後の方は運転手が言っ